



日本一の桜並木「静内二十間道路桜並木」の後継樹が里帰り ー林木遺伝子銀行110番による巨樹・名木等のクローン増殖の取り組みー

ポイント

日本屈指の桜の名所「静内二十間道路桜並木(新ひだか町)」の開花標準木等の後継樹の苗木が、国立研究開発法人 森林研究・整備機構 森林総合研究所林木育種センター 北海道育種場から里帰りします。

概要

国立研究開発法人 森林研究・整備機構 森林総合研究所林木育種センター 北海道育種場(北海道江別市)では、我が国の貴重な林木遺伝資源の保存を図るとともに、品種改良等に活用することを目的とした林木ジーンバンク事業を実施しています。

この事業では、各地の天然記念物や巨樹・名木等の収集・保存を行うとともに、事業の一環として、所有者からの要請により後継樹を増殖する取り組みである「林木遺伝子銀行110番」を行っています。

今回は、北海道新ひだか町にある「静内二十間道路桜並木」(エゾヤマザクラ、カスミザクラ)の5個体の後継樹として、つぎ木によって増殖し育てた苗木が里帰りします。

日時: 令和7年4月22日(火) 11時

場所: 静内二十間道路エントランス広場(新ひだか町静内田原712)

問い合わせ先

国立研究開発法人 森林研究・整備機構 森林総合研究所林木育種センター

北海道育種場(平日8:30~17:15) Tel:011-386-5087 Fax:011-386-5420

事業責任者: 遺伝資源管理課 課長

担当者:

収集管理係長

広報担当者: 連絡調整課

連絡調整係長

おおつか じろう
大塚 次郎

いらい まさたか
岩井 大岳

なかたに か な こ
中谷 香奈子

本資料は、北海道庁道政記者クラブに配布しています。

背景・経緯

全国には、学校や神社など身近な場所で地元の人々に親しまれ、ふるさとのシンボルとなっている天然記念物や巨樹・名木等が数多く存在します。こうした巨樹・名木等は、長い年月にわたって、風雪に耐え生育し続けているので、自然環境に対する適応性や抵抗性に優れている可能性が高く、林木遺伝資源として貴重なものです。一方で、樹木の中には衰弱しているものもあり、後継樹を増殖することが求められていました。

このため、林木育種センターでは、これら巨樹・名木等の収集・保存を進めるとともに、所有者等からの要請により衰弱している樹木の後継樹を増殖し、里帰りを行う取組である「林木遺伝子銀行 110 番」を平成 15 年から実施しています。これまでに、全国から 333 件の要請があり、255 件の巨樹・名木等の後継樹の里帰りを実施してきました（令和 5 年度末）。後継樹は、さし木やつぎ木で増殖したクローン苗木であり、親木と同じ遺伝子を持っていることから二代目として大きく成長することが期待されます。

内容

二十間道路は、宮内省の御料牧場が明治 36 年に管理用道路として造成したのがはじまりとされています。その後、同牧場を視察する皇族方の行啓道路として、牧場職員が大正 5 年から 3 年もの歳月をかけ、近隣の山々から桜を道路の両端に移植したもので、その道路幅が二十間（36m）あったことから、二十間道路と呼ばれるようになりました。現在では、約 2,000 本の桜が直線 7 km に渡って咲き誇り、「日本の道百選」「さくら名所 100 選」「北海道遺産」などに選ばれる日本屈指の桜の名所として多くの人々から親しまれています。

植栽から 100 年以上経ったため、老木化や強風による倒木・幹折れ、さらに害虫被害も深刻な状況になってきました。100 年以上守ってきた歴史もあり、後継樹を残したいということから、開花標準木など希少価値の高い桜 5 個体を対象に林木遺伝子銀行 110 番の申請を受けました。令和 5 年 1 月に枝を採取（採穂）し、3 月につぎ木によるクローン増殖を行いました。その後、苗木は順調に生育し、屋外に植栽しても生育できる見込みとなったことから、後継樹となるクローン苗木が静内二十間道路に里帰りすることとなりました。

図、表、写真等



二十間道路桜並木
開花標準木



採穂の様子



里帰りする後継樹